



学校便り  
No. 3 0

# 二天一流

令和8年1月15日(木)

文責：池田 誠

先日、武蔵小学校の校庭で「どんどや」が開催されました。私も学校に飾った小さなしめ縄を焚かせていただきました。

2日後、いつものように各クラスの授業の様子を見て回りました。あるクラスでは、タブレットを使って社会の調べ学習を行っており、また、あるクラスでは、電子黒板で動画を観ていました。

そのとき、ふと「不易流行」の文字が浮かびましたので、校長室に戻って「学校の不易流行」について考えてみました。



【武蔵校区 どんどや】

## ふえきりゅうこう 「不易流行」言葉の由来

不易とは、「時代を超えても変わらないもの」、流行とは「時代の変化とともに変えていく必要のあるもの」という意味です。

「不易流行」の言葉の由来は、江戸時代の俳人・松尾芭蕉が俳諧の理念として提唱した、「**不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず**」

という言葉にあるようです。(弟子が書いた著書より)

松尾芭蕉は、俳句上達の秘訣を聞かれ、「過去の自分に飽きることだ。」と答えたそうです。永遠に人を感動させる「不易」と、その時代ならではの「流行」の句を両立させたいと考えていたようです。

現在は、伝統や本質(不易)を大切にしながら、時代に合わせて革新(流行)していく姿勢や、両者の調和を指す言葉として使われています。



## 学校における不易流行

学校教育における不易とは、「豊かな人間性の育成」「正義感や公正さの尊重」「自律心、他者への思いやり」「人権尊重、自然を愛する心」「生命尊重」などの普遍的な価値観や教育の基盤を指すのではないかと考えます。教材や指導方法は変わっても、育てたい態度や心は昔から変わっていないということです。

例えば、道徳の目標である「道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと」や生徒指導の目標「個性を伸ばし、社会性を身につけ、自己の幸福追求と自己実現を支えること」は、私たち大人が子どものころから変わっていない大切な教育の指針となっています。

一方、学校教育における流行とは、「タブレットをはじめとするICTの有効活用」「生成AIの活用」「SDGs教育やダイバーシティ教育」「いじめ・不登校・ヤングケアラー対応」などが代表的なものです。

現代社会は急激な変化に直面しており、教育現場もその変化に敏感でなければなりません。「強い者、賢い者が生き残るのではない。変化できる者が生き残るのだ。」進化論で有名なダーウィンの言葉です。私たち教職員も変えること、変わることを恐れずに、今の時代に必要な教師の資質・能力を身に付けなければならぬということです。

例えば、来週から実施される教育相談(子ども一人一人との面談)は、時代の流れとともに、子どもたちの心のケア(いじめや不登校の未然防止)が重視されるようになったことで始まりました。まさに教育の流行と言えるでしょう。

## 不易と流行のバランスが大切

ベテランの教師は「社会の変化の激しい時代だからこそ流行に踊らされるのではなく、不易の教育を進めていく必要がある」と感じ、不易が大きな比重を占める傾向にあります。反対に若い教師ほど、流行に重きを置き、「学校は環境の変化に敏感に適応していかなければならない」と感じている傾向があります。

どちらも正解ですが、重要なのは、どちらか一方に偏るのではなく、「不易」と「流行」のバランスを保つことです。偏った授業の例を挙げます。



- ベテラン教師が苦手であるICT活用を嫌がり、いつも教科書と紙だけで授業を行っている。
- 若手教師がタブレットと電子黒板ばかりを使用し、黒板やノートは一切使わない授業を行っている。  
どちらの教師も「それでも学力がつけばいいじゃないか。」という言い訳をしそうですが、偏った授業では本当の意味での確かな学力は身に付かないと考えます。

前者は、児童1人1台のタブレット端末配当により、教育の質を向上させ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現できる可能性があるにもかかわらず、それを無駄にしています。また、未来の子どもたちにとってICT活用能力の習得は不可欠です。

後者は、ノートを使うメリットである「書くことで情報を脳に定着させ、情報を整理し、アウトプットしやすくする」効果を無視しています。伝統的な黒板のほうが、電子黒板よりも目に優しいし、子どもたちの考えや思いを視認しやすい利点もあります。

今後いっそう急激に変化していくと考えられる社会の中であって、私たち教職員は、教育における「不易」と「流行」を十分に見極めつつ、両方のバランスをとりながら、子どもたちの教育を進めていく必要があると考えています。